

唐木順三全集

筑摩書房版

唐木順三全集第二卷

昭和四十二年七月二十五日初版第一刷發行
昭和五十六年九月三十日増補版第一刷發行

著者 唐木順三

發行者 布川角左衛門

發行所 筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八

郵便番號 一〇一—九一

電話 東京(24)七六五一(營業)

東京(24)六七一一(編集)

振替 東京六一四一二三

印刷 株式會社精興社
製本 鈴木製本株式會社

Printed in Japan 0395—74502—4604

乱丁・落丁本の場合は、ご面倒ですが小社読者係あてにご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

鷗外の精神

一 鷗外精神史	三
---------	---

一 鷗外探求	三
--------	---

『キタ・セクスアリス』から『堺事件』まで

二 歴史を超えるもの	六
------------	---

『安井夫人』から『寒山拾得』まで

三 邂逅と追蹤	一〇二
---------	-----

拙齋、蘭軒、霞亭傳

二 鷗外雜記	一四九
--------	-----

一 獨逸時代	一五九
--------	-----

森 鷗外

二	小倉時代	121
三	鷗外小論	122
四	鷗外雜記	121
五	追補 一	100
六	追補 二	111
七	漱石と鷗外	*
	あとがき	110
	改訂増補版の刊行にあたって	111
I	生涯	115
1	森 家	115
2	養老館	110
3	名から物へ	114
4	醫學校	115

5	留 學	二七
6	戰鬪的啓蒙	二八
7	二つの戦争の間	二九
8	鷗外の位置	三〇
II	若き鷗外	三二
1	鐵道とハルトマン	三三
2	所謂追鷗論争	三四
III	『舞姫』『うたかたの記』『即興詩人』	三五
IV	『キタ・セクスアリス』	三六
V	歴史小説四つ	三七
VI	在野の一時期	三八
VII	『青年』	三九
VIII	『禮儀小言』の問題	四〇
	あとがき	四一
	東京ライフ社版あとがき	四二
	現代教養文庫版あとがき	四三

鷗外論拾遺

..... 四〇七

鷗外について..... 四〇七

鷗外をどう讀むべきか..... 四〇九

全集に初めて收録された『半日』..... 四一〇

『父親としての森鷗外』を讀んで..... 四一二

鷗外と漱石..... 四一四

鷗外と荷風..... 四一九

鷗外の歴史小説..... 四二三

森

鷗外——その人と文學——..... 四二七

後記..... 四三〇

*この部分については巻末「後記」を参照されたい。

鷗外の精神

一 鷗外精神史

一 鷗外探求

『キタ・セクスアリス』から『堺事件』まで

鷗外が『キタ・セクスアリス』を発表したのは明治四十二年である。それから大正元年に歴史小説の第一作『興津彌五右衛門の遺書』を書くまでの間を、森潤三郎は鷗外の文壇再活躍時代と呼んでゐる。

『興津彌五右衛門の遺書』が乃木大將の殉死に觸發されたものであることは定説となつてゐる。即ち、鷗外當時の日記に、「九月十三日（金）。晴。輜車に扈隨して宮城より青山に至る。午後八時宮城を發し、十一時青山に至る。翌日午前二時青山を出でて歸る。途上乃木希典夫妻の死を説くものあり。予半信半疑す。」「十八日（水）。半晴。（前略）午後乃木大將希典の葬を送りて青山齋場に至る。興津彌五右衛門を弔して中央公論に寄す」とある。それが發表されたのは十月號であつた。これが所謂歴史小説に筆を染めた最初で、爾後の鷗外の創作の中心

が歴史小説と史傳にあることはいふまでもない。

乃木大將の殉死を聞いてから『興津彌五右衛門の遺書』が發想せられるまで、わづかに五日間である。そしてこの五日間が、鷗外の死に至るまでの創作の方向を決定したことになる。然しこれはあまりに急激な、また重大な變轉である。先に『遺書』が殉死に觸發されて書かれたと言つたが、觸發されるからには、既にそれだけの素地が準備されてゐなければならぬ。溫い雨の後に急に水仙の芽が出たとしても、既に出るだけの地下の準備がなければならぬ筈である。

鷗外の準備が果してどのやうなものであつたらうか。それを具體的に推察するための材料といつても、我々には著作以外にはない。さういふことを念頭にひとまづおいて、『キタ・セクスアリス』以下の作品を讀んでみた。所謂文壇再活躍時代に於て、鷗外を外から刺戟したものは何であつたらうか。その主なるものとして次のことが考へられる。夏目漱石が『吾輩は猫である』以下の作品を矢繼早に發表し世評を高めたこと。當時の自然主義に對して反撥乃至嫌惡を感じたこと。文壇の毀譽褒貶が我々の想像する以上に鷗外に響いたこと。所謂大逆事件が起り世人を駭かせたこと。イブセン、オイケン、マアテルリンク、その他の外國思想から來るモラルの問題が鷗外の思考の材料になつたこと等が擧げられる。

『キタ・セクスアリス』は鷗外を知る上に重要な問題を含んでゐる。主人公の金井湛君は哲學が職業であるのに、小説か脚本を書いてみたいと思つてゐる。然し藝術に對して高い價值を認め、非常に高い要求をしてゐるために、中々筆を下すにいたらない。つまらないものは書きたくないのである。従つて當時流行の自然主義の小説に對しても、これを藝術として扱つてゐるのではない。作者がどんな心理状態で書いてゐるかが面白いだけである。そ

して性慾以外に人生がないかの如き態度をみて、「人生は果してそんなものであらうか」と疑ふ。ここに第一の問題がある。即ち藝術に對する高い要求とは何を指してゐるか。金井湛の解してゐる人生とは果してどういふものであるかである。それが消極的に自然主義的なものでないことは解る。然し積極的には、夏目漱石が『吾輩は猫である』以下の小説を書き出し、それを「非常な興味を以て讀み」「技癢を感じた」こと以外には解らない。ここで、金井湛が果して漱石の『猫』等に於て高い藝術的要求を充し得たか、人生とは果してそんなものであるかといふ胸奥の疑問に解答を見出し得たかを考へてみるに、「技癢を感じた」といふ方に力點があつて、「非常な興味を以て讀んだ」のは、その結果ではないかと思はれる。然しこれは一私見としておいて前へ進むことにしよう。

藝術に對して高い要求をもつが故に筆を下せなかつた金井が、何故自分の性慾史を書くにいたつたか。人生即性慾と解する態度が公認せられるとすれば、自分は世間の仲間はずれといはざるを得なくなる。ノルマルでないことになる。然し自分がさうだとは思はない。さうでない證據に自分の性慾史を書いてみようといふことになる。高いものを書いてみたいといふ「兼ての希望が妙な方角に向いて動き出した」のである。ここからはもう有名な「自己辯護」の論に近い。即ち『キタ・セクスアリス』は兼ての高い要求をもつた主人公が、妙な方角に動きだして、自己辯護、自己生存の正當性の證明のために書かれたものであるのに、知らず識らずの中に藝術即自己辯護といふ結論に落ちてゐる。しばらく鷗外の言葉を聞かう。「僕はどんな藝術品でも、自己辯護で無いものは無いやうに思ふ。それは人生が自己辯護であるからである。あらゆる生物の生活が自己辯護であるからである。木の葉に止つてゐる雨蛙は青くて、壁に止つてゐるのは土色をしてゐる。草むらを出沒する蜥蜴は背に緑の筋を持

つてゐる。沙漠の砂に住んでゐるのは砂の色をしてゐる。Mimicry は自己辯護である。文章の自己辯護であるのも、同じ道理である。」これは鷗外にしては存外曖昧な論である。一體自己辯護とは何であらうか。自己といふ何か一定のものがまづなければならぬ。既に自己を護るといふからにはまた敵がなくてはならぬ。果して人生とは自己防衛であり、藝術もまた自己防衛の手段であることなほ生物の保護色の如しといふことになるであらうか。これは獨斷といふ外はない。それをここで論議しようとは思はないが、唯明瞭なことは、鷗外がここで敵をありありと感じてゐる點である。自己辯護といふ言葉自體が、鷗外を評した批評家の言葉なのである。それにひつかかつて人生が即ち自己辯護であるといふやうな、からんだ應酬をしてゐるのである。鷗外の敵といふのは當時の批評家や文壇ゴシップの類であつた。鷗外が何か書くときすぐ愚癡とか厭見とか言ふ評者がある。情がないといふものもある。冷淡な男だといふ者もある。街學的だとも、雜報的だとも、いろいろの評が出る。當時の彼は一々それを氣にして應酬する。そして結局これらの惡評を、生きた蛙を丸呑にする積りで、ごくりとのみこんでゐるとまで書くやうになつた。いはば不貞くされである。或時は「あそび」、或時は「傍觀」、或時は Resignation として自らの立場を説明するまでにいたつた。自己辯護の説の小説への發展とでもいへよう。草の中の蛙が青いやうな青さである。ここには先に書いた藝術への高い要求もなければ、人生とは果してそんなものかといふ語勢もない。決して調子の高いものではないのである。

鷗外が社會の動向に對して放つた諷刺の一聯がある。『沈黙の塔』（明治四十三年）『ル・パルナス・アンビュラ』（明治四十三年）、それに『灰燼』の最後の『新聞國』等がそれである。鷗外の博識と位置をもつてすれば、これほど易々たる仕事はない。従つてまたそれらの作品が、藝術に對して高い要求をもつてゐる人に到底満足を

感じさせうるものでもないことは當然であらう。或は長篇『灰燼』の中絶は『新聞國』を書きながら、そのつまらなさを身にしみて感じた結果かもしれない。つまらないといへば、これらの諷刺作品に輪をかけたものがある。『團子坂』（明治四十二年）『さへづり』（明治四十四年）『なのりそ』（同年）『女がた』（大正二年）等の一幕物或は對話がそれである。中でも『女がた』は度し難いものがある。三流文士の三流作品でもこれ以下ではありえない。これがあの、鷗外全作品中、最高位置にある『護持院ヶ原の敵討』と同年同月に發表せられてゐるといふことは奇怪とでも言ふ外はない。これらの作品は低調凡俗の一語につきる。

鷗外が漱石に對して感じた「技癢」を充し得たのは、恐らく『雁』（明治四十四年—大正二年）であらう。首尾一貫した構想をそなへ、上手といへば上手に違ひないのだが、僕の好みに合はないのは如何ともし難い。鷗外がいろいろ工夫したり、味なことを書いたりすればするほど嫌氣がさして來るのを如何ともし難いのである。『灰燼』は一層野心的な、幅の廣い構想をもつてはじめられたが、峠を越すに至らずして終つた。それが未完成のままで已んだ眞因はどこにあらうか。作者が別にこれといつて原因を辯明してゐない以上、臆斷による外はないのである。然しここで早急の推斷を下すのを差控へ、しばらく他の面に移つてみることにしよう。

『青年』（明治四十三年—四十四年）『カズイスタカ』（明治四十四年）『妄想』（同年）等を一系列として並べることが出来る。ここには「あそび」とか「傍觀」とかで片付け得ない何物かがある。

『カズイスタカ』がよい手引を與へる。これは大學卒業當時の、即ち鷗外二十歳當時の追憶談といへばひとまづ

追憶談ではある。主人公の若い花房醫學士は作者自身であり、老醫はその實父である。この老翁と若い主人公を比較してかう書いてゐる。翁は病人を診てゐる間は全幅の精神を以てこれを診てゐる。その病人が輕からうが重からうが、鼻風であらうが死病であらうが、それに對する態度に變りはない。盆栽を翫んでゐる時でも、茶を啜つてゐる時でもその通りである。いはば熊澤蕃山のいふ、志を得て天下國家を事するのも道を行ふのであるが、平生顔を洗つたり、髪を梳つたりするのも、矢張同じく道を行ふのであるといふことを、その行爲に於て示してゐるが如くである。それに對して若い主人公はどうであるか。同じく病人を診てゐながら、何かしたいこと、する筈のことが別にあつて、それをせずに姑く病人をみてゐるといふやうな落着かないものがある。それでは何をしたいのかと聞かれても、具體的な答は出來ない。何をしてゐても同じことで、これをしてしまつて、片付けておいて、それからといふやうな考へから離れることが出來ない。この青年主人公によつて示されるものは、あそびとは凡そ縁のない、いや全く反對の態度であるといへる。

當面の問題は、何故鷗外がこの時になつて、自分の青年時代を回想し、自分の青年時代の特色を右のやうなものとして書き示したかといふことである。これも臆斷による以外に材料はない。然しこの場合は、先のそれよりは稍々立入つて出來さうな、或る自然の推察が出來來さうである。即ち、明治四十三年の鷗外に、明治十四五年時代の青年鷗外との、或る心理的一致が招來されたのではないかといふことである。自分のいまやつてゐることの外に、もつと重大な、もつとやるべき筈のことがありはしないかといふ同じ氣持の復活である。ここから『灰燼』の中絶問題に對する臆斷へはもう一足である。即ち鷗外は、いま書いてゐる長篇『灰燼』以外に、もつと重大な、もつとやるべき筈のことが出て來て、遂に筆を投じたのではないか。しかしこれも尙推測の範圍を出ない。

『青年』へ移らう。

青年といふ標題はどういふ氣持からつけられたのであらうか。『カズイスタカ』に於て自分の青春をふり返つた心理と同じものがここにも見出されるのではないか。主人公小泉純一を、あるところで「理想主義の看板のやうな黒く澄んだ瞳」と書き、この瞳で批判せられてゐるのは、當時の自然主義であるといつてよい。然しそれと同時に、自然主義に反撥しながら、眞向素面の反對も出來ず、傍觀者、Registationとして自己を擬態化しつつ、知らず識らず自然主義の影響をうけてゐる鷗外自身も、やはりこの黒い瞳でみられてゐる一人である。さういふことは一應解る。然し勿論それが全部ではない。この作は他のものにくらべて未整理で混雜してゐる。その混雜さがいまの場合、僕の興味をそそることになる。つまり鷗外に於ける青春の回想が未整理のまま、或は半無意識のままにここに投げ出されてゐるのではないか。『青年』の中で、鷗外自身に相違ない一人物を「干からびた老人の癖に、みづみづしい青年の中にはひつてまごついてゐる人」と評してゐるところがある。）従つて、いま僕が自分のこのやうな下心からしてこの作を整理しようとしても、なかなか困難な上に、不明瞭なものとなる怖れはあるが、とにかく進んでみよう。

『純一』の日記の斷片』がある。その中に次の言葉がある。

「生きる。生活する。」

答は簡單である。併しその内容は簡單どころでは無い。

一體日本人は生きると言ふことを知つてゐるだらうか。小學校の門を潜つてからと言ふものは、一しやう懸命に此學校時代を駆け抜けようとする。その先きには生活があると思ふのである。學校と言ふものを離れて職業に

あり附くと、その職業を爲し遂げてしまはうとする。その先には生活があると思ふのである。そしてその先には生活は無いのである。現在は過去と未來との間に劃した一線である。此線の上に生活が無くては、生活はどこにも無いのである。

そこで己は何をしてゐる。」

これと全く同じことが『妄想』には自己の體驗として語られてゐる。『カズイスタカ』の場合も同様である。ここで鷗外は、青年時代に青春をもち得なかつた歎きを書いてゐるわけである。明治といふ時代の要求した實用第一主義の犠牲となつた青春喪失の歎きである。この失つた青春のいらいらしさが、同じ心理で蘇生して來たのではないかといふのが前提であつた。失つた青春は再びそのままの姿で歸ることはあり得ない。鷗外はここで「死ぬるまで彈力を保存したい」といふ言葉を使つてゐる。それは小泉純一といふ青年をもち來つて鷗外自身の擬態を否定批判させながらも、一面に於て、老いて尙彈力を持つ自身への信頼と希望を語つてゐるのではない。同時に明治以降の日本が、日々の要求に忙殺されながらも依然として保持してゐる日本の彈力に觸れてゐるのではないか。

ルネッサンスは東洋にはない、従つてそれが招來した科學と世界の發見も日本にはない。またルネッサンスの延長としての産業革命、それから來る殖産と資本と機械もまた自らにしては生れ得なかつた。明治の時代は日本に自然には生育し得なかつたところの西洋近世文化の輸入と消化に繁忙を極めた時代であつた。この繁忙さにも拘らず、日本のみが何故に西洋に壓倒されなかつたか。西洋以外の世界がすべて西洋化し、その本來のものを失ひつつあつた時代に於て、日本のみが依然として彈力をもち續け得たのは何故であるか。更に一層立入つて言へ